
エデンの花に髪留めを

秋姫優姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデンの花に髪留めを

【Nコード】

N1413X

【作者名】

秋姫優姫

【あらすじ】

舞台はユーヒ大陸の西端に位置する王国エデン。

歴史上最大の死者となったテンガク大戦争から10年が過ぎようとしていた。

国と国は同盟を結び、戦争の爪跡を大きく残しながらも世界は平和に向かっていた。

同じく平和を主張する王国エデンだったが、裏では世界を大きく変える力を持った「パンテロシック」の開発に成功する。

それを待っていたかのように、約1年前。

王国エデンと国境を挟むように突如建国された帝国テヴァ。

帝国テヴァは平和を主張する国々とは一切同盟を結ぶことはなく、逆に圧倒的な武力でその存在を大きくしていった。

物語は王国エデンと帝国テヴァの運命の下にいる1人の少年と王女。

そしてその仲間たちから動き出す。

帝国テヴァの目的は？王国エデンの未来は？

そして少年たちの答えは？

王国エデン 1

城門の大きな鐘の音があかね色の空に鳴り響くと、エデンの森の鳥たちが一斉に飛び立っていった。

エデンの城下町の隅々にまで届いた5回の重低音は、今の王国エデンの平和の象徴であり、夕方の5時を知らせるこの町のシンボルでもある。

テングク大戦争から10年。王国エデンは至る所に戦争の傷跡を残しながらも、一歩ずつ平和を取り戻していた。

「姫様はまた抜け出したのか！」
鐘の音が鳴り終わると城の中は一段と騒がしさを増す。

「申し訳ありません！夕方のレッスンのためにお部屋へ伺ったところ、既にもぬけの殻で。」

「いいから探せ、探すんだ！」

城下町とは反対側のエデンの森側の城壁。

テングク大戦争の影響により、押すと城壁のレンガが外れて子供1人がやつと通れるくらいの隙間ができる場所があるのを、この国の王女アマーサ・シュシケルト以外に知る者はいなかった。

通る時にだけレンガを外し、通り抜けるとレンガを戻す。戦争から10年もの間、誰にも気付かれることなく王女を自由の世界へ羽ばたかせる魔法の道だ。

夕方5時とはいえ、たくさんの葉が夕焼けの光を遮る森の中は外灯もあるはずがなく夜に近かった。

城とエデンの森は直通で帰るのには数分。この時間に森に人影はなく、誰にも見つからない。

この魔法の道は城の離れにあるために、森から城に戻る際にも見つかる心配はない。

城の兵士たちは、いつの間にか王女が城に戻ってきている。そんな平和な毎日を送っていた。

エデンの森の奥。この森に存在する唯一の小屋から少年少女が外に出てくる。

木造のその小屋は、民家というより秘密基地に近い。

「そろそろ帰らないと。さすがにお父様が心配するわね。」

一国の王女は背伸びをして森の澄んだ空気を吸うと他の3人と向かいあい手を振った。

「シユシユ、暗いし城の前まで送るよ。」

「大丈夫よ、クーちゃん。それより急がなくちゃ。部屋でグースカ寝てるジルによろしくね！」

そう言うのと城のほうへ駆け出していった。

「大変だね、お姫様つてのも。」

「クーガー、僕はね、走って揺れない胸には興味は無いんだよ！」

「リクさん、最低です。」

「行こうか、ミウちゃん。」

その後も胸について力説するリクを無視してクーガーとミウは先に小屋へ戻っていった。

王国エデン 2

「兄さん、いい加減起きてください!」

エデンの森の小屋からミウの声が聞こえると、それをうるさそうに目をこすりながら兄のジルがゆっくりと身体を起こした。

幼い頃から両親と呼べる存在がいなかったジルとミウ。数年前までは、城下町の叔父の家で暮らしていたが、今ではこうして2人で自立して暮らしている。

この森にこの小屋を作ったのが、ジルたちだった。ジルとミウの兄妹にリクとクーガー。そして、

王女シュシュ。5人は幼馴染であり、数年前の事件をきっかけに、その絆は強くなっていた。

「兄さん、今日はトンカツにしてみたの。」

「え、朝から!？」

「・・・嫌だったですか?」

その大きな瞳をうるうるさせながら見つめられると兄のジルに残された選択肢はたった1つ。

「おかわり。」

ミウの顔は天使のように晴れやかになった。

ジルは週に5日、王国エデンの南の国境沿いにあるベルカ鉱山に足を運ぶ。この鉱山には高値で売却できる鉱石が多く採れるためだ。

この日は丸一日働いて4200ミルを手にした。1000ミルで牛乳が買え、5000ミルで弁当が買え、10000ミルあれば城下町の定食屋で相当の食事が堪能できる。ジルの収入のみで兄妹2人の生活を支えているために貯金は無く、その日暮らしを強いられていた。

このユーヒ大陸ではミルという共通の通貨単位が使われている。ミルという共通の通貨単位が採用されたのはテンガク大戦争の後のこ

と。偉い人が経済の統一性だとか、格差社会がどうとか言っていたが、ジルには全く関心の無いテーマだった。

生活が苦しいとはいえ、リクたちやその両親が差し入れを小屋に運んでくれるために食事に困ることはなかった。裕福とは言えないが、確かな幸せがこの小屋にはあった。

「レベンス様！ たった今、シャン大佐がお戻りになられました！」
エデン城の謁見の間。深紅に鳳凰の彫刻が威圧的に輝く玉座には国王レベンス・シュシユケルトが腰を下ろしている。その隣の一回り小さな玉座には女王アマーサ・シュシユケルトの姿があった。

「シャンベルカ・ストレルカ、未来都市マリアより只今戻りました。」

「シャン大佐という兵士が、国王の前に敬意を示すがごとく頭を下げひざまずく。」

「これ。楽にしてくれ、シャン大佐。そなたには感謝しておる。さて、例の件は？」

「はい、上手くいきそうです。さすがは未来都市マリア。あの技術力は1000年は他国の追隨を許さないでしょう。私も少し休んだら次はロゼへ向かおうと思います。」

他の兵士とは違い純白の鎧に身を固めているその男は、たちまち周囲の兵士たちの話題の標的となった。

「おい、あれが薔薇騎士シャンか。」

ユーヒ大陸にその名を轟かせるこの男。

通称、薔薇騎士。

名前が知れ渡っているシャン大佐だからこそ外交関係がスムーズに行えるため、日々、他国を飛び回っている。

「シャン様！」

国王と薔薇騎士の話が一段落すると、珍しく静かに玉座に座っていたアマーサ・シュシユケルトが立ち上がり純白の鎧に飛びついた。

「アマーサ様、半年振りですね。大きくなりましたね。」

「もう、様付けしなくていいったら。」

抱きついたままの女王様は、頬を膨らませた。

「今回は何日くらいエデンにいられるの？」

「久しぶりの帰国なので、3日ほどはゆっくりさせていただけようと思います。」

アマーサ・シュシケルトはそれを聞くと周囲に会話を聞かれないようにシャン大佐の耳元で囁くように提案した。

「じゃあ、森の小屋へ行きましょう。ジルたちも逢いたがってるわ！」

シャン大佐は左目を髪で完全に覆い隠しており、右目しか見えないその瞳で笑い、そして頷いた。

そのままアマーサ・シュシケルトは反転して父でもある国王レベンス・シュシケルトの顔を合わせると、シャン様と出掛けてくると強く言い放った。

国王もシャン大佐には絶大なる信頼があり、滅多に外出を認めないが今回ばかりは首を縦に振った。

「ジルか、久々に稽古でもしてやるかな。」

左腰に金色に輝く名刀・ロゼリウスに純白の鎧。この国で知らぬ者はいないほどの男、薔薇騎士が森の小屋へと足を運ぶ。

王国エデン 4

先ほどまで降っていた雨はあがり、森の木の葉から太陽の光を纏った雫が滴り落ちた。

地面のぬかるみが歩くたびに気になるが、薔薇騎士にはそれ以上に我が国の王女を気にかけていた。

「アマーサ様、折角の綺麗な洋服と靴が泥で汚れてしまいます！」
「もう、二人きりの時くらい王女扱いしないで！」

次第に鳥の声が増えはじめ、黒い雲は西の空へ流れていった。なるべく水たまりを避けてジルの小屋を目指し歩いているが、確実に汚れないのは無理な話だった。

「アマーサ様！私がおぶって差し上げます！」

ほら、と言わんばかりにシャンはしゃがみ背中をシュシュに向ける。最初は渋っていたシュシュだが、シャンの押しに観念したのか。仕方ないわねと愚痴をこぼしながらも背中にも身体を預けた。

薔薇騎士の純白の鎧の足元は、白の面影は無い。

どうせシュシュが鎧の汚れを気遣ったところで、シャンは間違いなく汚れなど全く気にせず逆にシュシュを気遣うだろう。

大切なものを守るためなら己の命すら惜しまないだろう。薔薇騎士とはそういう男だ。

さすがに王国エデンで初となる20代で大佐の地位を獲得しただけはある。

太陽が顔を出して、はじめは2つ横に並んでいた影は1つになった。国を守る騎士と国を守る王女。この1つになった影は王国エデンの未来すら背負っている。

「もう、揺すらないでよー！」

はっはっはっ、とシャンの笑い声がエデンの森に響き渡る。

先ほどまでの雨の雫は葉から滴り落ち、それが太陽の光を浴びて輝く美しい森に笑い声と鳥のさえずり。

王国エデンの平和そのものを表しているようだ。

シユシユを背負い10分ほど歩くと、ようやく小屋に辿り着いた。

「シ、シャン先生!？」

小屋の前には、2つの見覚えのある顔があった。

「クーガー!相変わらずのイケメンだな。」

王国エデンでもクーガーほど顔立ちのいい人間を見たことがないのは事実だが、色恋沙汰を聞いた事は無かった。

「リクピードも。久しぶりだ。」

シャンは、クーガーの左隣にいるリクにも話しかけた。

しかし、半年振りの再会の喜びを表現する笑顔はリクの表現にはない。

「シユシユを、おんぶだと!?うらやま死刑!うらやま死刑だ!」
そのままリクは、シャンに指をさしながら羨ましいと死刑をつなぎ合わせた言葉を放った。

背中シユシユはその言葉に顔を赤くして、その背中にありがとうという言葉を残し、ピョンと背中から飛び降りた。

「くそつ、爆発しろ!!爆発しちまえ!!」

こうなったリクは止まらない事を知っているために、シユシユとシャンは苦笑いを。隣のクーガーが冷たい視線で傍観という選択肢を選んだようだ。

すると、すぐにリクは我に返ったような表情を見せて独り言のように呟きはじめた。

「いや、待て。シユシユに背中に密着されようが胸が無いから当たらないじゃないか!」

クーガーとシャンは既に直視出来ないほどの禍々しいオーラを放つシユシユを横目で見ると、ご愁傷様でしたという表情を見せた。

「はっ、なんだ。そうだよ。所詮はぺったんこシユシユか。僕としたことが何を焦ってしまったんだ。ふっ、まだまだ僕もくぼぶあ！？」

リクの独り言は最後まで語られる事なく、シユシユの左ボディープローからの右アッパーでリクは地面に崩れ落ちた。

これが格闘技の試合なら間違いなくレフェリーが試合を止める一撃だったが、もちろんレフェリー不在のためにシユシユの猛攻は続行された。

「今回は絶対に死なすんだから！」

死なすと連呼しながらシユシユは、綺麗なロングヘアをなびかせ地面に横たわるリクを何度も何度も踏み潰す。

「ああぎもぢいい、もつと！もつと踏みにじってくださいいい！！！」
DMのリクには逆効果で目を輝かせてヨダレを垂らしている。

「もう、リクさん！うるさいから静かにしてください！」

小屋のドアが開き、ミウが顔を覗かせた。

「あれ、シャンさん！？シャンさん！！あれ？」

ミウはシャンの突然の訪問に顔を出しながら驚き慌てた。

「ミウちゃん。お兄さんはいるかな？」

シャンは、小屋からぴよぴよこと歩きながら出てきたミウに優しく話しかける。

「ごめんなさい、兄さん今日は仕事お休みなんですけど稽古に出かけちゃったの。」

ミウは申し訳なさそうに頭を下げた。

「シャン先生。ジルの稽古場ここから近いんですけど顔出しに行きますか？」

「うん、クーガー。案内してくれるかい？」

「案内もなにも、俺たちが出会った場所ですよ。」
そう話すと少しだけクーガーの表情が曇った。

「フラン地下通路か。」

シヤンは髪で隠れている左目を気にする素振りを見せた。

「ちょうど、アマーサ様も落ち着いたみたいだし皆で行きましょうか。」

ごめんなさいね、と顔で訴えるシュシュの後ろではリクがピクピクしている。

ちよつと火の元だけ確認してくると小屋に戻ったミウを待って、起き上がらないリクを置いてフラン地下通路へ向かうことにした。何故か全員が穏やかではない表情だった。

薔薇騎士と獄竜と 1

エデンの森を南に抜けてしばらく歩くと、フラン地下通路の入り口が見えてくる。

隣国のロゼの国境付近に位置するこの通路は、そのはるか昔からエデンとロゼを結ぶ通路として利用されてきた。

しかし、今現在、フラン地下通路は封鎖された状態になっていた。

10年前のテンガク大戦争の頃からか、ちょうどエデンとロゼの中間の国境上にある地下通路の大広間に1頭の竜が住みついたからだった。

もちろん、竜など架空上の生物であり信じる者も少なかったが。

当時は竜の存在が浸透してなく、その地下通路入り口と大広間入り口を兵士たちが常に見張りをしている状況だった。

今ではエデンで竜のことを知らない人物を教えてほしいくらいだ。

いつの間にか輪の中に紛れているリクも含めて、封鎖された入り口に人1人がやっと入れるくらいの隙間をくぐり抜けて地下通路の中に入る。

長い間使われていないために松明の明かりなど無く、奥に行けば行くほどに闇が力を増していった。

シャンが右手の手のひらを上に向けると詠唱もなしに、それこそ松明ほどの大きさの炎を出してみせた。薔薇騎士と呼ばれるように剣術はもちろんのこと、魔術も王国エデンでは5本の指に入るほどの実力者である。

それを明かり代わりにしてシャンを先頭にさらに奥へと進んでいく。しかし、シャン達には笑顔も、会話さえも無い。

フラン地下通路。ここはジル達と、当時少尉だったシャンがはじめて出会った場所。

そして、シャンがジル達の命を救った場所。
右手で明かりを灯しながら、シャンは髪の毛で隠されている左の目を気にしていた。

薔薇騎士と獄竜と 2

今から3年前。ジルヤリク、クーガーにシュシュが15歳。ジルの妹のミウが14歳のある夏の日のことだった。

当時はエデンの森に小屋も無く、ジルとミウは叔父の家に住んでいた。毎日のように皆で集まっては、冒険と称して危ない場所へ足を踏み入れていた。

「ごめんなさい、城を抜け出すのに手間取っちゃって。」
シュシュが息を切らし名も無い木の下で先に待っているジル達のもとへ駆け寄る。

いつしか待ち合わせ場所になったエデンの森名も無い最大の木。他の木々と比べると5倍以上の高さを誇る。森の外から見ると、この木だけが異様なほどに頭を出している。

「あとはクーガーとアリスだけだな。」

遅れること数分、異常なまでの美少年と美少女がようやく到着する。この頃から王国エデン随一のイケメンであるクーガーは、この木に辿り着くまでに何人も女の子に声をかけられ時間に遅れることがしばしばあった。

ただその女の子たちも、隣にいるアリスを見るとお似合いね、と諦めるしかない。

華奢な身体に長い黒髪に白い肌。さらに整った顔立ちの本物の王女であるシュシュすら超えるほどの魅力と気品を感じさせる。

クーガーとアリスは家も隣、生まれた日も1日違い。人生で顔を合わせない日は無いほどでジル達の公認の仲でもあった。

「さて、みんな揃ったところで今日はどこへ行くのかしら？」

冒険を一番楽しみにしているのは、王女という名の下に自由を奪わ

れてきたシュシュだった。

「兄さん、あまり危ないところは私困りますよう。」

この6人のリーダー的存在はジル。皆もジルを信頼していて、現に今までジルを頼り事故などは一度も無かった。

「みんなさ、ドラゴンって信じるか？」

ジルのその発言に皆は顔を合わせた。

「まさか、フラン地下通路か？無理無理。第一、兵士たちが見張りをしてるんだから中には入れないし。」

クーガーが徐々にジルに反対の意思を示す。

「兄さん、危ないです！反対です！ダメ、絶対です！」
当然、ミウも反対している。

「あら、いいじゃない、ドラゴン！！冒険の匂いがあるじゃない。」
逆にシュシュは賛成。それにリクも続いた。

「わ、わたしも。ドラゴンって見て見たいかも・・・。」

反対するクーガーの横で申し訳なさそうに左手を挙げながらアリスが答えた。

結論、見張りの兵士がいるんだから行けるところまで行って帰ろうとジルが反対派をまとめ上げてフラン地下通路へ向かうことになった。

まさか、こんなにあっさり地下通路に入れるとは提案したジルさえも思わなかっただろう。

確かに、地下通路の入り口には見張りをする王国エデンの兵士がいた。しかしその兵士は木陰で居眠りという職務放棄。正面から堂々と侵入に成功した。いや、堂々と正面から入っているんだ。侵入という言葉すら似合わない。

ドラゴンが現れた頃は物珍しさからか見物人が後を絶たず、兵士による警備も今より何倍も厳重だった。今ではその存在、危険さが王国エデン中に知れ渡り、ここ2、3年はフラン地下通路に近付いた者さえいない。

どうせ誰も来ないという兵士の怠慢が侵入を容易にした。

地下通路の中はまるで洞窟のようで。本来なら闇に包まれる通路も、この時の地下通路にはまだ兵士の見回りもあつたため一定間隔で壁に灯りがかけられていた。

そのため足元に心配はなく、すんなりと奥に進むことができた。

地下通路の長い長い下り坂を歩いていくと、

誰にも見つかることなく、あっさり大広間に辿り着いた。

「しっ、誰かいる。隠れよう。」

ジルが人の気配を察し、みんなを近くにあつた巨大な岩の陰に誘導する。

子供6人が隠れても十分なほどの巨大な岩の陰から、兵士2人の存在を確認した。

その兵士たちは、しばらく話しこむと出口のほうへ歩いていった。

大広間は地下通路の中でも特に音や声が響きやすく、兵士たちの会

話もところどころは聞こえたが大人の男性特有の低い声は聞き取りにくく、すべてが聞き取れた訳では無かったが。

どうやら、ちょうど見張り交代の時間のようだ。ジルは、今がチャンスだ。行くぞ。と立ち上がるが、その返事は消極的だった。

何故か大広間には灯りが少なく、この先の道に何があるのかすら見えない。それほどだった。

それが今までの冒険には無かった心の底からの恐怖心が足を進ませない。はじめは乗り気だったのが嘘のようだ。

「早くしないと兵士が戻ってきちゃうよ。」

それでも結局立ち上がったのはシュシュだけで。他のみんなは岩陰から出ようとはしなかった。

ジルは2人だけでもと、立ち上がってシュシュの手を引いた。

「ちよつと！なんで手なんか握ってるのよ！」

「暗くて危ないだろ。女の子が怪我したらどうすんだ。」

他のみんなは、結局私をお姫様扱いする中で。彼だけは私をお姫様扱いせず女の子として見てくれる。今回もそう。お姫様だから危ないじゃないと女の子だから危ないと手を引いてくれた。大広間に灯りが少なくて本当に良かった。顔が赤いのバレてないかしら？

そんな気持ち知らずにジルは、シュシュの手を引きながら歩く速度を早めた。

ジルとシュシュの後ろ姿を見ながら、岩陰は修羅場となっていた。

「ねえ、ちよつと兄さんとシュシュさん手繋いでませんか！」

騒いでいるのは珍しくミウだった。

「私だつて兄さんと最後に手を繋いだのは26日前なのに何なんですか兄さんつたらー!!」

「あ、兄弟愛ですか！いや、まて。これはもつと深い。こいつあ兄と妹の禁断の愛ですね！もう手やら何やら絡み合つてムヒヨツスー！」

その隣でリクも暴走しはじめてしまい、ツッコミのシュシュがいない今、詰んでいる。

「もう兄さん！私も危ないですから手繋いでくださいー！」

そう言いながらミウはジルの後を追い暗闇へ走り出してしまった。

「ミウちゃん1人じゃ危ない。俺たちも行こう、アリス。」

クーガーはアリスへ手を差し出し、しっかりとアリスは頷きその手を握る。

ミウを追う後方から、うらやま死刑！うらやま死刑！と声がするが振り返ることは無かった。

「え、なにこれ。牢屋？」

先に進んだジルとシュシュの目の前には巨大な鉄格子が、まるでここから先は通さないとばかりに暗くて見えない天井の先にまで壁のように立ち塞がった。

「ジル、この奥にドラゴンがいるのかしら？」

「いや、生き物の気配はしないな。」

危険もないようなので、しばらく鉄格子を調べていると、扉があるのを見つけた。

「鍵穴だな、鍵は間違いなく王国エデンが所有。これ以上は無理だ

な。」

追いついたクーガーがアリスの手を握りながら、もう片手で鉄格子の扉をガシャガシャと開けようとするが、もちろんびくともしない。「兄さん、手を離さないくださいね！怖かったら抱きついてもいいんですよ？別に、仕方なくですからね！兄さんが怖いならさあどうぞ抱きついてください！！」

隣ではミウが目を瞑りながら両手を広げている。

「さて、どうするか。」

ジルは、そのミウの頭を撫でながら皆の顔を見渡した。

「ちよつとごめん、5秒ちようだいね。」

シユシユはそう言つと、一瞬のうちにポケットから針金を取り出した。

それを鍵穴に差し込むと、カチャカチャと中で動かす。カチャつと扉から音がすると、次の瞬間には扉が開いていた。

その間、わずか2・8秒のことだった。

「さあ、行くわよ。」

「いやいやいや、ツッコミどころ満載だよね。何今の！？」

「うるさいわねクーガーは。私を誰だと思ってるの？脱走姫アマーサ・シユシユケルトよ？」

誇らしげに笑いながらシユシユは答えた。

「国王！フラン地下通路の扉が何者かによって開かれました！」
王国エデンの管理室に扉が開いた反応があり、城では大騒ぎになっていた。

「鍵は盗まれていないだろうか？」

「はい、問題ありません。特殊な構造の鍵ですので、この鍵が無いと絶対に開かないはずなんです。」

その鍵を針金で2・8秒で開けられちゃったと知ったら、どんな反応を示すだろうか。

「ほう。見張りは何をしておるのかのう。至急確認させる。」

お怒りの国王のもとへ、もう1人の兵士が駆け寄ってきた。

「申し訳ございません、国王！アマーサ王女がまたしても脱走しました！どうやって鍵を開けたのかは分かりませんが。」

「馬鹿な、今度の鍵はフラン地下通路の格子扉並のセキュリティを、ま、まさか！？」

国王は立ち上がった。

「今動ける部隊は大至急フラン地下通路へ向かわせろ！全部隊だ！敵は獄竜！殺せるもんなら殺して構わん！！！」

兵士は無線で連絡を取り合う。一番地下通路に近い者でも到着まで10分はかかるようだ。

「国王レベンズ。やはり鍵を開けたのはアマーサ王女。」

「アレスよ、早くに息子を失い今度は娘まで失うことになったら、シユシケルト家に与えられた新しい2つの命。その2つともを失うこととなったらワシは先代に顔向けできん！」

国王レベンズの怒りと動揺がこの謁見の間を支配していた。

「時に国王レベンズ。シャン少尉が口ゼに里帰りしております。」

2本の角が生えた兜。背中には三つ又の槍。戦神と呼ばれる男は謎かけのように国王に問いかけた。

「私を試すとは面白い男よの、アレス。ここで冷静さを失っていたらワシは玉座に座っておらん。」

「承知しております。」

「99%。鍵はアマーサが開けたとみて間違いない。さて、ロゼ城とフラン地下通路は直通なのは存じてるか？ロゼ城からなら5分足らずで大広間に間に合う。」

国王レベンスは、左後ろに立つアレスを横目で見つめる。

「アレスよ、今すぐにシャン少尉に連絡は取れるか？」

「いえ、無理です。もう既にフラン地下通路に向かわせておりますから。2度の連絡は不要でしょう。」

その言葉に国王レベンスは、はっはっはっ、と笑ながら玉座に寄りかかり謁見の間の高い高い天井を見上げた。

鉄格子をくぐると、さらに暗闇となり数メートル先に誰がいるのかさえ見えないほどだった。

おい、みんないるか？その問いに返事だけはあるものの、誰がどこにいるのか。おおよその場所さえ把握出来ない。

「いないな、ドラゴン。」

ジルが気配を感じないのなら、そこにはいないと言っていい。それほどジルは、気配を感じとる能力に優れていた。

「仕方ない、見せてあげよう。僕の力を！」

次の瞬間、リクを中心に灯りが広がっていった。リクの右手を見ると、火の玉が浮いている。

「リク、マジで魔術使えたんだ。」

「当たり前じゃないか！初級魔術塔の主席だぞ僕は！」

王国エデンには兵士を育てる環境として、剣術と魔術の学校のようなものがある。それが塔であり、初級、中級、上級と分かれている。上級を卒業すると、念願の兵士になれるというシステムだ。

中級は16歳、上級が18歳からのため、現在15歳のリクは初級魔術塔。クーガーは初級剣術塔で兵士に向け勉強中の身だ。余談だが、クーガーも初級剣術塔の主席である。

年齢がクラスアップの資格条件で、その年の実技試験に合格すると上のクラスの塔へ行ける。

上級の塔の実技試験。つまり、兵士になれるかなれないかの試験はかなり鬼畜で、合格者は1割と言われている。そのため、どうしても兵士になりたいが合格できずに30年ほど上級の塔に通い続け、そして諦める者もいたと聞く。それほどに王国エデンの兵士は厳しく、そして強い。

「・・・くるぞー!!」

何かを感じ、ジルが叫ぶ。

「気配を殺してたのか。それも、完璧に。」

落ち着いたジルとは裏腹に、他の全員は恐怖に潰されていた。

体長は5メートルほど。緑と黒に彩られた体に光る目。時の紋章のような鱗。リクが照らす光に姿を見せたのは、紛れもなくドラゴンだった。

寝ていたが火に反応して目覚めたようだ。

「なんだ、あまりでかくないんだな。」

見上げるジルの後ろでシュシュ達は恐怖で声も出さず、よじやくミニウが甲高い叫び声をあげた。

あまりの恐怖に叫び立ちすくむミウをシュシュが強引に引っ張り、アリスをクーガーがおぶり竜から遠ざかる。

「おい、ジル！何をしてるんだ、殺されるぞ？」

「・・・ジル？」

リクの呼び掛けに返事は無く、ジルはただ目の前の竜を見上げ目を輝かせていた。

誰が見ても竜と戦う気満々の意志が伺えるようだ。

「まったく、ジル。そうやって一人で突っ走るのはきみの悪いところだ。」

リクは後ろささりしていた両足を前に進め、ジルの隣に並んだ。

「不思議なものだ。もう恐怖すら感じない。いや、もう恐怖などとうに越えたのか。この勝負、まず勝ち目は無い。一撃。たった一撃喰らえば僕たちは死ぬだろう。それでも戦うのか、ジル？」

「ああ。」

「ふうー、何がきみをそんなにかき立ててるのか。しかも僕の初めての実戦の相手が人じゃなくて竜とは。」

ジルに武器はなく、リクに使える魔法は塔で習った初級魔術のみ。

もちろん、竜が手加減をするはずがない。

「死ぬなよ、リク。」

「付き合わされるこっちの身にもなってくれよ、ジル。」

「くるぞー！！」

「シュシュ、足元気を付けて。」

竜からは遠ざかったものの、リクが炎から遠ざかったために辺りは

暗闇近い。鉄格子の扉の方角がわかるはずもなく、手探りで竜がいる場所から確実に遠ざかっていた。

「アリス、大丈夫か？」

「こんな状況まで他人を気遣えるのね、クーガー。」

「茶化すなよ。ミウちゃんは．．．大丈夫そうじゃないな。」

「うわああああん！お兄ちゃああんお兄ちゃああんお兄ちゃああんお兄ちゃああん！！！」

「こら、泣きながら暴れないでよ。手を引っ張るこっちの身にもなつてほしいわ。」

泣き暴れるミウをなだめながら、小さく肩でため息をついた。

「というかシュシュ。なんでそんな冷静なんだ？」

「なんでかしら。自分でもよくわからないの．．．あら？」
シュシュは後ろを振り返った。

「今、鍵の開く音がしたわ。」

「したわって、確定かよ。あっちって、ロゼ側だろ？」

「鍵の音ならすぐに分かるわ。大好きなもの、鍵の音。」

「．．．．．そうか。」

シュシュの大好きという言葉に、少しドキツとしたクーガーだった。

薔薇騎士と獄竜と 8

竜が右の前足を振り落とすと、それを避けるようにジルとリクは左右に散る。

「この暗さで何故竜はここまで正確に僕たちの位置を。しかし、ここで灯りをつけたら竜に殺してくれと言っているようなもの。」
暗闇からぼんやりと見える姿。それを頼りに避けるのが精一杯で、攻撃に転じる隙がなかった。

「ジルは余裕だな。それに比べて僕は。何のための塔の修行だ。」

「リク、危ない!!」

ジルの叫び声に上を見上げると、竜の巨大な爪が勢いよくリクを切り刻もうとしていた。

「うわあああああ!?!」

とっさに左へ転げ飛ぶと、間一髪。竜の攻撃を避けきった。

「ぎ、逆に飛んだら、死んで、いた。」

今さっきまで自分のいた場所を見返し、この戦いの場にいる愚かさを実感する。

「ジ、ジル! やっぱり無理だこんなの! 王国の兵士にだって勝てるわけない!」

「それは聞き捨てならないな。王国エデンに属する兵士。その1つ1つの魂は王国が誇るべき宝とも言っている。無論、獄竜にさえ負けない。」

ジルとリクの目の前に、薔薇の形に彩られた炎が現れる。それは薔薇の形をした炎なのか。炎を纏った薔薇なのか? それはとても美しく、暗闇を朱い光に包んだ。

その炎を見た竜は、ゆっくり後ずさりをする。

「炎を薔薇の形に？魔法を何かの形にすることさえ超高等技術だ。しかもそれを詠唱無しで。もはや人間業じゃない。」

光に包まれた先に1人の兵士がいた。純白の鎧を纏った男。

「折角の休暇にこんな場所へくるとは。鉄格子の鍵が開くとね、王国に通報が入る。はじめはこの盗賊団かと思ったらまさか子供とは。」

「王国？王国の兵士？王国エデンの兵士が何故ロゼ側から？」

純白の鎧の男とリクは話を続ける。

「先日、私の母であるカヨーテ・ストレルカが亡くなった。その最期の顔を見にな。」

「カ、カヨーテ・ストレルカ！？ロゼ女王！？その息子だって！？」

「申し遅れたね。私はシャンライカ・ストレルカ。王国エデン少尉だ。」

左手を握り自分の胸に当てる王国エデン特有の姿勢。

これが現在は大佐であるシャンとの出会いだった。

「シャンライカ少尉、しかし灯りをつけるのはいかなものかと。」
「シャンでいい、皆が私をそう呼ぶから。そう制し言葉を続けた。」

「竜は気で居場所を把握している。暗闇だろうがあいつには私も含めて7人の場所が1ミリのくるいもなくバレているだろう。」

ジルがその言葉に驚く。

「シャンさん、あなたも全員の位置を？」

「戦場で生き抜くには必要不可欠な力だ。極めれば気を限界まで隠している伏兵すら意味を成さない。」

少し竜から距離のある位置で話しを続ける。

「君たちが忍び込んだ理由については後だ。まずはここから出よう。」

「シャンがジルとリクを出口へ向かわせようとする。」

「竜の殺気が強く．．．しまった!？」

顔色を変えたシャンは、ジルたち2人を置いて王国エデン側の鉄格子へ走り出す。

そのスピードは、鎧を纏っているとは思えないほどで今のジルたちの倍以上と言っても過言ではなかった。

シャンが走り去ると同時に、竜が漆黒の翼を広げて同じく王国エデン側へ飛び立つ。

狙いは、クーガーたちのほうか。

ジルたちの放つ気が弱まらないために獲物を変更というところだろう。

「リク、気付いたか？竜が放つ気の変わり目に。」

「まさか、無理だ。可愛い女の子の位置なら僕のリーダーが反応しちゃう自信はあるけどね。」

「この状況でいつものリクでいられるのがすごい。俺は．．．無力

だ。」

「悔やむのは後だ。とりあえずシャンさんを追おう！」

「おい！竜が飛んできたぞ！」

クーガーが指をさす先に翼を広げた竜が勢いよく迫ってくるのが見えた。

既に気絶し、アハハハハと笑い続けているミウ以外に恐怖が押し寄せる。

空中からそのまま爪を振り落とそうとする竜の攻撃にシャンが追いつき、剣を抜いた。

「くっ、一発が重い！」

攻撃を弾き返すと、シャンの剣、ロゼリウスほど長さのある竜の爪が2本。折れて地面に転がる。

「早く、鉄格子の外へ！その鉄格子には魔法結界があつて中の攻撃は外に届かない！」

遠くから、中ですか！？中で攻撃しちゃうんですか！？と奇声が聞こえたが、この状況で相手をしている余裕はなかった。

「なにこれ、扉が開かないわよ！？」

「そうか。鉄格子は、一度くぐると自動的に鍵が閉まる仕組みなんだ。誤作動や故障で侵入者を防ぐためだろう。くそっ、こんな時に！」

入る時は全員が通り終わるまでクーガーが扉を手で押さえて、最後に自分自身を通った。

その後、扉は自動的に閉まり自動ロックがかかった。

クーガーの優しさが、自動ロックに気付かせなかった。

この間も、シャンは竜の攻撃を防ぎ続ける。

「クーガー！ミウちゃんをお願い！」

ミウをクーガーに預け、シュシュはポケットに手を入れた。

「5秒、ちょうどだね。」

「どうして？どうして開かないの！？ねえ、開いてよ！」

5秒どころか30秒は鍵穴に針金を通し続けるが、頑丈なる鉄格子の扉の錠は開こうとしない。

その近くでは竜の猛攻。1度でもシャンが守りを怠ったら、その攻撃はシュシュたちを貫く。

その恐怖が、シュシュの手を震わせ手元を狂わせていた。

「ねえ、あの兵士さんは鍵を開けて入ってきたんでしょ？鍵をもらったらどうかしら？」

「アリス、さすがだ！兵士さん、鍵が開かないんです！貸していただけませんか？」

クーガーは、竜の攻撃を防ぎ、時に反撃に転じているシャンに問いかけた。

視線は竜を見続けたまま口を開いたが、それは良い答えでは無かった。

クーガーは悩む。シュシュは鍵穴と向き合い続けるが、錠の外れる音は無い。

ミウは錯乱していて、アリスはクーガーに守られている状態。

シャンから返ってきた言葉。私が持っているのはロゼ側の鍵。エデン側の鍵は無く、脱出するとするなら開けられるロゼ側の扉。しかし、ここはエデンとロゼを結ぶ地下通路。全力で走っても1分以上ミウやアリスもいるとなると、さらにタイムロスがある。その間に竜を無視できるはずがない。いくらシャンでも全員を守りつつ、出口にたどり着ける確率は高くはないだろう。

「なら、こいつを倒せばいい。」

右手と左手に折れた竜の爪を持ったジル。そしてリクがようやく追

いついた。

リクは岩陰に隠れ、詠唱をはじめ。

それを見て竜の殺気がほんの一瞬だけジルたちに傾いたのをシャンは見逃さなかった。

両手で印を組み、少ない詠唱から魔術を繰り出す。

「薔薇炎舞！」

先ほど洞窟を照らした薔薇の形をした炎が、今度は竜の身体に一輪、大きく咲いた。

竜は洞窟内を振動させるがごとく雄叫びをあげる。

「凄い、効いてる！」

すぐさま、シャンは剣術の攻撃に移る。

「ロゼ流、薔薇一閃！」

シャンが鞘に閉まっている剣に手をかけたかと思うと、竜の右翼が大きく切断され、さらに竜は痛みからの咆哮をあげる。

「なんだあれ？居合い．．．見えないってもんじゃない。いつ抜いたんだよ？」

剣術の塔に修行をするクーガーだからこそ、次元の違いを大きく感じる。

シャンが剣に手をかけたかと思うと、竜の翼は切れ、その間にシャンの名刀ロゼリウスが鞘から出た形跡はなかった。

抜いてから収めるまでの一連の流れが全く見えないのだ。

素人から見たらそれこそ、剣に手をかけたふりしたらいつの間にか相手が切れてましたということだ。

「すげえ．．．これでまだ少尉。」

「君たちの殺気が一瞬だけ竜に隙を生んだ。礼を言う。さあ、畳み掛けよう！」

翼を失い宙を舞うことを封じられた竜に、詠唱が終わったリクからの追撃が当たった。

「爆発だ！爆発しろ！ほら早く爆発しろ！」

竜の身体の至る所から爆発がおきる。

「なんだ、あの子供は？どの属性にも属さない爆発系魔術。上級魔術だぞ？」

その素質に自身も薔薇騎士と呼ばれ恐れられるシヤンは驚愕する。身体中から黒煙があがる竜は、あの周囲が痺れるほどの咆哮が嘘のように弱々しい声で咆える。

「竜の爪の硬度は、名のある刀に相当すると聞いたことがある。」

ジルが竜へ向かい走り、右手に持つ折れた竜の爪を右の前足に振り落とした。

簡単に深々と突き刺さった爪は、竜に激痛を伝える。

「なるほど。伝説に遜色ない。さて、もう一本！」

ジルが左手に持つもう一本の爪を振り落とすと、竜に変化があった。

「痛っ！！！」

振り落とした爪は、竜の身体には刺さることなく弾かれ、ジルは振り落とした左手を押さえる。

弾かれた竜の爪は地面を転がっていった。

「なんだよこれ、まるで金属に振り落としたみたいだ。」

ジルはその反動に左手が痺れているようだ。

みるみる緑色の身体は深紅に染まり、漆黒の時の紋章が身体から浮き出てくる。

「君たちは岩陰に隠れるんだ！」

シヤンが一步前に出る。クーガーは女子組を岩陰に誘導する。

「ねえ、クーガー。私たち死んじゃうのかしら。」

「弱気なんて、シュシュらしくないな。」

シュシュが泣きそうな顔をしていた。そこにリクがクーガー達の隠れる岩陰にやってくる。

「この中で諦めてるのはシュシュ、君だけだ。」

シュシュをバカにするのかと思ったが、リクの表情は真剣だった。

「珍しくまともなこと言うな、リク．．．なんだよ、その汗は!?!」
その場に崩れ落ちたリクの額には、もはや人間が出す量じゃない汗を浴びたような汗が流れていた。

「魔力暴発。体内で魔力が暴走しているんだ。僕みたいな初心者がいきなり上級魔術なんか使うところなる。」

「喋るな、少し休んでろ。」

クーガーは、リクを寝かせようとしたが地面は岩だらけで横になれる状況じゃない。

「私は知ってるわよ。そもそも初心者が上級魔術を使おうとしても発動すらない。リクの努力と覚悟、私は見直した。ほら、王女様の膝枕なんだから。」

シュシュは地面に正座すると、膝の上にリクの頭を乗せた。

「ハアハア、こ．．．これが、お．．．王女様の生足ですか!?!? 柔らかい柔らかい柔らかい! ああ、もう膝枕など生温い! ! 踏んづけてください! ! !」

「人がせつかく見直したのに．．．。お望み通りにしてあげるわ、この変態魔術師! ! !」

洞窟内に「たまらん!」とこだました後、リクは気絶した。

夢に消えた少女 1

「さあ、きみも隠れるんだ！竜の様子がおかしい！」

「リクは暴発するのを分かりながら戦った。ここで俺が引くわけにはいかない。そもそも、ここに皆を連れてきたのは俺だ！」

竜は瞬く間に色を変え、深紅の竜と化した。

「それに、きみじゃない。俺の名はジル！ジル・ミオソーティスだ！」

「分かった、ジルくん。だが戦う以上、命を賭ける！」

いきなりシャンから突風が吹くと、ジルからでもわかるほどの魔力が身体の隅々から溢れ出ていた。

「薔薇炎舞！」

炎の薔薇を3輪、龍の身体に咲かせる。

しかし、竜は熱がる素振りすら見せずにびくともしない。

「エデン流、近の太刀。陽炎！」

その腰から剣を抜き竜を斬りつけると弾かれるが、その斬り口が燃えはじめた。

「確かに身体が金属のようだ。炎もまるで効いていない。」

シャンは間合いを取ると、龍の反撃に備えるように岩陰にいるクーガー達を守る距離に位置取る。

「シユシユ、アリスとミウちゃんを頼む。」

「え、クーガー？どうするつもりなの？」

「俺は昔、アリスと約束したんだ。お前を守るくらい強くなるって。」

クーガーは立ち上がって、アリスと目を合わせた。

「少しだけ待っててくれ、アリス。俺だけ黙って隠れてるのもカッコ悪いしな。」

アリスは何も答えられなかった。死と隣り合わせ。押し潰された感情。その最前線に飛び込むクーガーにかけ言葉が見つからない。

それは幼い日の約束で。

「アリス、どうした？またいじめられたのか！？」

「クーガー……。……ぐすつ。」

「泣くな、アリス。……そうだ！これから俺がそばにいて、ずっとアリスのこと守ってやる！」

「本当……？」

「ああ！もっともっと強くなって、アリスを守る！約束だ！」

「これからずっと一緒にいてくれるの……？」

「うん、ずっとだ。」

「うん……。クーガーなら、アリスのこと大切にしてくれるよね。」

「……じゃあ、アリスはクーガーのお嫁さんになる！」

「お嫁さん！？」

「だってクーガー、ずっと一緒にいてくれるんでしょ？」

「……大切にするから。」

恥ずかしそうに顔を隠しながら、クーガーは返事をした。

夢に消えた少女 2

クーガーは覚悟を決め、走り出した。しかし、その場所は竜とは違う方向だった。

そこで何かを拾う仕草を見せると、クーガーは竜へ向かい、その速度を増した。

「イヤッホー！フーイ！」

それも、普段のイケメンなクーガーからは予想もしない奇声を発しながら。それも走りながら1人でニヤニヤしている。

「んと、あれはクーガーよね？本気で引くんだけど。なにあの変態2号みたいなの？」

表情もドン引きのシユシユが岩陰からその奇行を覗きながら、隣のアリスに話しかけた。

「クーガーね、剣を持つとテンション上がってあんなっちゃうの。」それを、全く問題無いかのようにアリスが満面の笑みで答えた。

「あれをテンションが高いつてだけで片付けられるのかしら？まあ、要するに、剣の変態なのね。そこに寝てる変態よりは一億倍もマシだわ。」

指差す先には、魔力暴発で。最終的にはシユシユの渾身の一撃で意識をなくしたリクが泡を吹いている。

「でも、アリス。剣なんてあるわけないじゃない。」

そう言いながら、クーガーの手元に目を凝らす。

「あ、竜の爪！クーガーはあれを拾いにいったのね！」

クーガーは、発狂しながら竜の爪を突き刺すが、当然の如く弾かれる。

「あれほど強く突き刺したのに、反動の痺れがない？・・・ならば！！！」

シャンは何を思ったか、クーガーに向けて剣を投げた。宙を舞う名刀ロゼリウスは、勢い良く回転しながらクーガーにピンポイントで飛んでいく。

「クーガー！」

ジルがクーガーの名を叫ぶ。クーガーは回転しながら迫る剣の存在に気付いているが、避ける素振りはない。

名刀ロゼリウスの斬れ味は随一。万が一、身体に剣が触れる事があれば無事では済まない。

しかし、そんな不安をかき消すように簡単に剣柄を掴み、その名刀を自分の手に収めた。

「すごい、あの少年は剣に愛されている。あの魔法少年といい、化け物揃いか。」

名刀を手にしたクーガーは、奇声をあげず落ち着いていた。

「シャンパー二流、空蟬……！」

クーガーの一太刀は、竜の身体に7つの斬撃の痕を残した。

「シャンパー二流？」

ジルには聞いた事もない流派。それもそのはずだった。

「剣術において最古の流派。生命の流れを表すこの流派、現代では失われた技術。使いこなす人間はいないはずだが。あれは伝記で読んだ通りの空蟬。何故あの少年が？」

竜の金属のような身体に傷を付けた実力。だが、その代償は大きかった。

「おい、クーガー！？」

クーガーは右手を押さえ、膝をついた。

「悪い、右腕折れちまった。実戦で初めて使ったが、慣れない技は使うもんじゃないな。」

冷や汗を流しながら苦笑いを浮かべるクーガー。

リクとクーガーがここまでやって、このまま終われない。それがジ

ルの答えだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1413x/>

エデンの花に髪留めを

2011年12月11日12時52分発行